

---

# **なんとなく短編書きたくなつたから書いてみた。(バトル編前編)**

神技

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

なんとなく短編書きたくなつたから書いてみた。（バトル編前編）

### 【Zコード】

Z38750

### 【作者名】

神技

### 【あらすじ】

なんとなく短編書きたくなつたから書いてみた。（前編）の続きなり。

(前書き)

続きたのひへ

「みゅ～ まずはかる～く10人からいつてみよ～」

司会者がそう言つと、10人の男がフイールドにやつて来た。  
体型は「コリマ」 チョから細マ チョ、イケメン、ガリガリと様々で  
ある。

「気を付ける、あのメイド服の女は雷魔法の使い手だ！」

「なんとか魔法を避けて魔力切れになつた所を一斉攻撃で倒そう！」

何かを忠告しようとした男を無視して円陣を組み、雄々（おお）しく雄叫びを上げる。

「気合い万全だね」 それでは、試合開始だよ！」

二

「まずは手始めに  
”指閃”  
」

”指閃”とは、簡単に言うと人差し指から細い雷のレーザーを放つ魔法だ。

チツ

「熱つ」

陽子が放つたレーザーはリーダー格のゴリマ チョな男の頬を掠めた。

「……今のは少し油断しただけだ」

「次は無いかもせんから気を付けて下さこよ」

「おう」

「余所見するな！ 次が来るぞーー！」

男達が構える。

「 ”指閃・乱” 」

”指閃・乱”は”指閃”の応用版で、全ての指から雷のレーザーを一斉に連続で放つ魔法だ。

指の角度によつてレーザーの進攻方向が変わる。

「つかーー？」

「ぐつ……」

「ふん」

「たりやりりやりりやり……」

「があああああつーーー！」

「ジムーー？ ぐあつーー？」

「樂勝樂<sup>s y</sup>…おつと」

「……ふつ」

「ヒヤツハ！ 弾幕には弾幕で対抗だアアアアアーーー！」

「むう……」

男達はレーザーの弾幕を辛うじて避けたり、少し掠めたり、身体

を揺らすだけで避けたり、高速で殴つたり蹴つたりして消したり、避けきれずに直撃して倒れたり、仲間を気にかけたが為に動きを止めて喰らつてしまったり、余裕振つて当たりそうになつたり、己の能力ですり抜けたり、弾幕で対抗したり、弾幕が一切来なくて寂しかつたりしていた。

ちなみに、陽子は：

「ふふ　ふふふふふ　ふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふ」

……”超”笑っていた。

「ぐう…かなり喰らつちまつたがそこまでダメージにはなつてない  
な。　お前ら大丈夫か？」

「はい」

「ふん」

「うん！」

「樂勝だぜ」

「……ん」

「ヒヤツハ！　こんくれー大丈夫だよー！」

「……うむ」

「ぐふつ…」

ガクッ…

「ジム！？　ジイイイイイイイイイイイイイムーーー！」

ジム、戦闘不能。

残り9人。

「…………惜しい仲間を亡くしたな」

「いや、まだ死んで無いから」

みよん

「…む？」

みよん...みよん...

「何だ?  
この音は?」

みよみよん

んー：何かが跳ね返るような音だね」

みよみよん みよみよん

「どうして、おまえは、おれのことを、そんなに嫌がるの？」

みよみよみよんみよみよみよんみよみよみよん

……来るぞ。構えろ！！！」

9人がゴクリと唾を飲んだ瞬間







なんと、やつをまで陽子が放ち続けていたレーザーの弾幕が全て壁や床を跳ね返りながら尋常ではない速さで此方に向かってきていたのだ。

「なん……だと……」

この絶望的な光景を見た9人は思わずハモつてしまつた。

「お、お前い...」」「...」恐怖をかか、感じてゐ場合  
「じゃねねねねねね...」

「そそ、そうですね……」  
「怖い……けど、頑張る

「……………」からは各自の生存を考える。「……………いくぞ」「全員死ぬなーーー！」

その掛け声と同時に、男達は走り出した。

1 時間後

גַּעֲמָנִים

い、嫌だ……死にたくないよ……」

「ジム…すま…ん

「俺は死ぬのか？」

「くつ…」

「……う」

フィールドには完全に無傷の陽子と、黒焦げになつた9人の男達が横たわつていた。

レーザーの弾幕は既に消えている。

全員、身体のあちこちを貫かれたのでフィールドは血塗れである。中には血だけではなく、様々な内蔵がはみ出でていたり、飛び散つていたりとこれ以上描写すると18禁になりかねないグロテスクなことになつてゐる。

……正直、吐きそ�だ。

「ふふふふふふ

」

……そんな地獄絵図を見ても笑つていられる陽子は怖すぎる。そして、この地獄絵図を作つた魔法の名を誰に言つまでもなく言い放つてフィールドから降りていった。

「”指閃・跳<sup>ちょう</sup>”

（陽子がフィールドをグロテスクに汚してしまつたので、連続バトルを中断して掃除中）

「みゅ～ やつぱり～ 陽子さんは～ 強いね～」

みゅ？

あれれ～？

もしかして～ボク視点？

みゅ～ 恥ずかし～よ～

ん～ ジヤ～

ボクの自己紹介を～してあげるよ～  
ボクは～ディスカだよ～  
え？

アンシェじゃないの？

違うよ～

ボクは～アンシェと似て非なる存在なんだよ～  
性別も～違うし～

髪と～服の色も～アンシェはピンクなのに對し～ボクはパープルだ  
し～

口癖も～若干違うんだよ～  
まあ～眼の色は同じ蒼なんだけどね～  
え？

アンシ～の眼の色は明るいグリーンじゃないの？

ん～ あれはね～カラコンなんだよ～

明るく見えるように～着けてるんだよ～  
でもね～

ホントは～ボクと同じ眼の色なのが～気に入らないみたいなんだよ～  
え？

何でアンシ～は蒼い眼が氣に入らないの？

それはね～  
おお～つと～

そろそろ～バトルが再開されるみたいだから～同会の仕事しなくち  
や～

それでは～  
またね～

（掃除が終わってバトル再開）

ナレックスだ。

フィールドが掃除されている間にちょっと家に帰っていた。  
……何をしていたかはノーコメントだ。  
まあ、言わなくともわかるだろうな。

「みゅ～ それでは～連続バトル再開だよ～！！ 次は20人～逝  
つてみよ～」

「漢字違うーー？」

1人の細い男が司会者に突っ込んだが、無視された。

ピ一

「つて、いきなりかよーー？」

そしてバトルは、ブザーだけで何の掛け声も無く始まった。

「さつきは時間掛けすぎちゃったから 一気にいくよ」

「え、つーー？」

「”雷波”」

前方に雷の波を放つ魔法。

5／1で麻痺させる。

「うわー？」

「尤斐！」

ג' יי' יי' יי'

卷之三

運が悪く、10人ほど麻痺した。

「う」

一 痛くないわ

それはそこ止  
たてそれ  
示モシテ  
”雷破流”  
とほほ同じ

九月二日

いい例だ。

もし、知らない奴がいたら調べる。

「続いて」  
“”  
**雷鎖縛**  
“”

雷で創られた鎖を複数放ち、相手を捕縛して一切の動きを封じる

少しでも触れたら麻痺る。

「...レーニング・ルーム」

「くう…」  
“土砂使い”的私まで痺れそう…

一  
じ  
や  
あ  
痺  
れ  
ち  
や  
え

ト、一見狂歌の。ナニヤ、ナノバ  
スア

能力を持つ女がケルケル巻になつた。

……熟鬼な女である。

「があああああああああああああああああああああああああああああ

あああああああ！！！」

「これで終わりね　”雷塊・極大” × 5」

らいがい

前方に雷の塊を放つ魔法。  
だが、今回は上空から落とすようだ。  
大きさは極大・大・中・小・極小とある。  
ちなみに、極大はかの”元玉”の2倍くらいの大きさである。  
……それを5つも放つたら小さい星なら滅亡してしまうのではない  
か？

ドツツツ「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオ……ン…」

フィールドが吹き飛んだ。

「…………」×20  
「ふう　すつきりした」

……陽子以外全員戦闘不能。

まあ、20人共麻痺して身動きが取れない所にあんな馬鹿でかい魔  
法を5つも叩き込まれたら大抵こうなるだろう……

（フィールドが吹き飛んだくらいで一々直していたら埒らちが飽かない  
ので、引き続きバトル開始）

「みゅ～ もうめんどくさいから～ 100人逝つちやえ～」

「え？」

100人がハモつた。

「じゃあ あたしもめんべいへやこから一撃で終わらせ  
ええ つ！！？」

100人が再びハモつた。

「それでは、バトル開始だよ！」

ちよつ、待つ！？

100人がまた再びハモつた。

一一

「いくよ　七つ奥義　紅　”赤光”」

”全てを破壊し、全てを破滅させる禍々（まがまが）しき紅い雷をや止め”と感じるまで永遠に広範囲に落とし続ける一つ奥義の一つ。

100人共、絶叫しながら地に沈んでいった。  
「面倒くさいからつて奥義はあり得ないだろ!」

十一

「はい 終わり」

観客には陽子の笑顔が鬼に見えたらしい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3875o/>

なんとなく短編書きたくなったから書いてみた。（バトル編前編）

2010年10月21日04時23分発行